

令和4年度

福祉体験作文

コンクール

作文集



©しゃらんちゃん



弥富市社会福祉協議会



この冊子の一部は、愛知県社会福祉協議会の『福祉でまちづくり総合推進事業助成金』により作成しております。

ごあいさつ

このたび、福祉体験作文コンクールに市内各校より多数の作文をお寄せいただき、誠にありがとうございます。優秀作文を作文集としてまとめさせていただきましたので、お手にとってご覧ください。

『with コロナ』の考え方から、全国的に様々な事業が開催されています。本会としましても、市内各校で実施している福祉実践教室において、昨年度は、講話が中心のものでしたが、今年度は、体験のできる実践教室を実施しております。今回お寄せいただいた福祉体験作文の中には福祉実践教室での内容が書かれた作文もあり、受講した児童・生徒の心に留まることができましたことを嬉しく感じております。また、印象に残ることで、いつかどこかで福祉に接する時、あの時の経験や感じたことが思い出されたり、更には役に立ちたりする機会が増えることを期待するものであります。さて、今年度の福祉体験作文につきましても素晴らしい作文ばかりでした。どの作文も『ふくし』について丁寧なまとめられており、『こうしたら良くなるな』や『あのようでしたらもっと良くなる』等、自身の意見がしっかりと書かれていました。このように相手の

立場に立ち、相手を考える。これはすなわち、『思いやり』に他なりません。『思いやり』とは、『ふだんのくらしの しあわせ』を実現していく中で重要となる考え方であります。この『思いやり』を行動に示すには、少し勇気がいります。『なにか文句を言われたらどうしよう』『なんだか怖い』といったことを考えてしまうかもしれません。ですが、そこから一歩踏み出し、行動に移すことが肝心です。そうすることで、自分自身の新たな一面を知ることができたり、相手を本当に知ることができたりすると思います。

結びになりますが、この福祉体験作文を通し、『思いやり』の心』が健やかに弥富市内で育まれていることを実感いたしました。『コロナ禍』から『with コロナ』の時代への変遷、目まぐるしく変わる時代の中で、ただ一つ変わらない『思いやり』の心』を弥富市民一人ひとりが持てるよう、皆様とよりよい弥富市を創造していきたくと願っております。

令和四年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

会長 八木 春美

令和四年度「福祉体験作文コンクール」作文集

- ・ 最優秀賞 自閉症を知る 弥富北中学校 一年 永久 桜 輔
- ・ 優秀賞 やつぱり自分の家が一番 桜 小 学 校 六年 泊 颯 蘭
- ・ 秀 逸 私にできる福祉活動 十四山東部小学校 四年 伊 藤 愛 栞
- ・ 入 選 実習を振り返って学んだこと 海翔高等学校 一年 竹 下 海 生
- ・ 入 選 高齢者疑似体験から学んだこと 弥富北中学校 一年 青 木 優 有
- ・ 入 選 ふだんのくらしの幸せ 白 鳥 小 学 校 五年 日 箇 原 央 空
- ・ 佳 作 人々の変化 十四山中学校 三年 船 野 あ お い
- ・ 佳 作 世界中の人に幸せを 弥 富 中 学 校 二年 佐 藤 那 々 子
- ・ 佳 作 福祉は人のためならず 栄 南 小 学 校 五年 加 藤 里 緒 菜
- ・ 佳 作 きんちゃんバスにのって 日 の 出 小 学 校 四年 三 輪 一 登

☆最優秀賞☆

自閉症を知る

弥富北中学校 一年 永久 桜輔

ぼくのいとこR君は自閉症です。「自閉症」とは、自閉スペクトラム症といい、対人関係、人と話す事が苦手、強いこだわりがあるといった特徴を持つ、発達障害の一つです。自閉症といっても、それぞれ人によって特徴が違います。R君の日常生活は、健常者とほとんど変わりません。だけど嫌な事があつた時や、悲しい事があつた時は、おこって、場所関係無しに大きな声でさげんでしまったり、泣いて自分の頭を思いつきり強くたたいてしまうことがあります。同じ年の子と比べてしまうと出来ないことが多くあつて、幼い部分もあります。でも、R君なりに成長しています。

ぼくは、時々R君とお風呂に入る事がありません。一緒に入るといふよりは、洗ってあげたり、ふいてあげたりとお世話する感じです。この間、いつもの様に入ると、自分で頭、顔、体を洗えるようになっていました。まるでおじさんが洗うかのようにガーツと一人で洗っていてビックリしました。R君のお父さんが洗いや、流し方などを一つずつ教えてあげて、その通りに出来るようになっていました。少し笑ってしまふよ

うな洗い方だったけど、ちゃんと出来ていてすごいなと思いましたが。お風呂を出て、「R君が自分で洗えるようになったんだね。」と話す時、「修学旅行に向けて、自分で洗えるように一生けん命努力したんだよ。」と教えてくれました。六年生が一人でお風呂に入るのには当たり前かもしれないけど、R君ができるようになるには大変なのです。毎日くり返し教えてあげてくり返し、出来るだけ周りの環境を整えてあげ、出来たことをいっぱいほめてあげ、少しずつ出来る事を増やしていきます。将来、自分で生活するためにR君も頑張っています。

もう一つ、大変な事があります。嫌な事があると大きな声でさげんだり、自分の頭を思いつきりたくとです。R君は、ゲーム、スイッチ、ユーチューブが大好きです。ゲームには勝敗がつきものです。R君は、ゲームに負けるとおこってしまいます。小さいころは、周りがわざと負けていました。いつまでもこんなものではダメなので、ルールを作ります。おこるならゲームはやらない。負けてくやしいR君は、自分の頭をガンガンたたきます。ぼくは、R君とそのお母さんが作ったルールを知っています。わざと負けようかなと思いません。どれだけ泣いてもR君のお母さんは、「ルールはどうだった。」と何回も聞いて、自分が「おこらない。」と言うまで聞き続けます。R君はちゃんと分かっているのです。でも、自閉症という障害の特徴

で難しいのです。

ぼくは今、反こう期の最中です。自分でダメと分かっているにも注意されると腹が立ちます。自閉症と反こう期は全然違うものだけど、R君の気持ちがよく分かります。このぼくのイライラした感じ、誰も分かってくれない感じの気持ちR君は、毎日なのかなと思うと、とても大変だなと思います。

R君は毎日一生けん命生きています。R君が外出先や飲食店でさわいでしまうことがあります。その時、冷たい視線を感じることはありません。確かに体の大きい子が、たくさんぬいぐるみを持って、頭をガンガンたたいて泣いていたら、何だろうと見てしまうと違います。でも、そんな時、怖いと思わないでほしいです。今、現実と一生けん命戦っているんだと、逆に応援してあげて欲しいです。

ぼくは、R君という存在がいて、自閉症というものを身近で感じる事ができます。しかし、健常者が普段の生活の中で障害を意識して生活すると言われても難しいと思います。車イスに乗っていたら、足が不自由なのかな。手話を使っていたら、耳が聞こえないのかな。杖を使っていたら、目が見えないのかな。と身体障害者の方なら気付けると思います。車イスがつまっていたら、押してあげる。ぼくは手話を使えないので、筆談で何となく手伝うことができます。でも、自閉症の方などは、何に困っているのか、どう接したら

いいのかわかりません。

毎年やる二十四時間テレビでは、障害者の方が、色々なことにチャレンジしています。十五分位のコーナーには映りきれないほど大変だったのだろうと思います。このテレビでも、こんな人が居るんだなと知るだけでも違うと思います。

毎年、四月二日は「世界自閉症啓発デー」というものがあります。この日だけでも、自閉症のことについて、考えてみてほしいです。周りの人と話すだけでも、意識するだけでも変わると思います。少しでも自閉症の方、障害を持っていらっしゃる方々が生きやすい世の中になってほしいなと思います。



☆優秀賞

やっぱり自分の家が一番

桜小学校 六年 泊 颯蘭

ぼくには、ひいおばあちゃんがいます。コロナが始まる少し前から、介護老人保健施設に入っています。コロナが始まると、面会が制限されました。一回の面会は、二人まで、施設の玄関でガラス越しに数分間だけ。ひいおばあちゃんの息子であるじいちゃんにそっくりなぼくを、ひいおばあちゃんはとてもかわいがってくれ、そんな形の面会でも、ぼくが合に行くと、ひいおばあちゃんは、とても喜んでくれました。ぼくはてれくさくて話すこともそれほど無いからすぐに帰りたくなってしまふけど、ひいおばあちゃんは、いつも一緒に行くぼくそっくりなじいちゃんとは、いつもうれしそうにニコニコしています。

コロナが少し落ち着いてきたころ、ひいおばあちゃんの『一日外出許可』が出て、自分の家に一日帰ってくるのが許されました。

ばあちゃんはその日仕事があつたので、じいちゃんがひいおばあちゃんをむかえに行き、自分の息子であるじいちゃんと二人きりで過ごしました。特に何をするわけではなかったけれど、今まで自分が過ごした家

の、自分がいつも座っていた場所でテレビを見ていました。お昼ごはんは、ひいおばあちゃんが好きな物を食べました。学校が終わってからすぐに、ぼくはじいちゃんの家に行きました。ひいおばあちゃんのとなりに座り、一緒にテレビを見たり、妹と一緒にひいおばあちゃんの背中をさすったり、足のマッサージをしてあげました。ひいおばあちゃんはニコニコと、

「ありがとね、ありがとね。」

と何度も言ってくれました。そして、一緒にお茶を飲んでおやつを食べている間も、ひいおばあちゃんはずっとニコニコしていました。

施設にもどる前にひいおばあちゃんはおなか痛くなってしまう、トイレをよごしてしまいました。じいちゃんがかた付けをしていましたが、ひいおばあちゃんもぼくも見ていることしかできませんでした。ひいおばあちゃんは、悲しそうな顔でじいちゃんに、

「ごめんな。」

と謝っていました。ぼくはひいおばあちゃんに、何も言つてあげられませんでした。

夕方になり、ひいおばあちゃんが施設に帰っていく時間になりました。ぼくは、

「またね。元気だね。コロナに気を付けてね。」

と言つて別れました。後からじいちゃんに聞くと、ひいおばあちゃんは、

「家はしゃべる相手がないから、施設に帰って早

く友達と話がしたいな。でも、やっぱりに家に帰ってくと孫やひ孫にも会えるし落ち着くわね。」
と言っていたそうです。

施設に入ったことよって、ひいおばあちゃんにはたくさん友達ができ、そこで毎日過ごすことが日常になりました。今は、息子であるじいちゃんやばあちゃん、ひ孫のぼくや妹と過ごすことが非日常となつてしまいました。しかし、ひいおばあちゃんがひいおじいちゃんと結こんした時から住んでいた我が家は、友達と過ごす施設よりもひいおばあちゃんにとつて、この先もずっと一番落ち着く場所であつてほしいと思ひました。次また、『一日外出許可』が出た時は、ひいおばあちゃんが施設から帰ってくるよりも前に家に行き、「おかえりー。」

と大きな声で迎えてあげたいと思ひました。そして、家族のことや学校のことをたくさん話そうと思ひました。



◎秀逸

私にできる福祉活動

十四山東部小学校 四年 伊藤 愛葉

私は生まれた時から、かみの毛をのばしていました。小学一年生になって、プールが始まる前にかみの毛を切ることになりました。その時に初めてヘアドネーションという福祉活動を知りました。

ヘアドネーションとは、小児がんや先天性のだつ毛しよう、事故などで頭はつを、失った子どものために、きふされたかみの毛でウィッグ（かつら）を作り、無料でいきようする福祉活動です。そして今年の夏、三年間のばしてきたかみの毛を切る時に、今回もヘアドネーションをすることにしました。

その時に、初めて小児がんで苦しんでいる子ども達の写真を見ました。その写真の子ども達は、強い薬のえいきようでかみの毛がなくなってしまうことを知りました。そこで私は、もう少しくわしく調べました。

国内では、年間約二千五百人が、小児がんにかかっていることを知りました。こんなにたくさんの子どもが、がんとたたかっていることにおどろきました。その中で一人の女の子のとう病生活のビデオを見ました。その女の子は、温泉がとても大好きな子で、突然病氣

になり、5才で亡くなりました。亡くなる4日前に、家族と温泉旅行に行きました。しかし女の子は、大好きな温泉に最後の日まで入ろうとしました。私は、どうして入らないのか考えました。それは、他人に自分の体や頭を見られたくなかったのではないかなと思います。もし私とその女の子だったら、やせた体で、かみの毛がない自分を知らない人達に見られたくないと思います。

病気になった時、見た目のせいで自分に自信が持てなくなつて、やりたいこともやれないと思うと悲しくなりました。ヘアドネーションをしても、病気はなおりません。でも、苦しんでいる子に、自信を持たせることができますと思います。だから私は、ヘアドネーションをこれからも続けたいです。一人でも多く、あきらめずに病気とたたかってほしいです。

この他にも、私を取り組んだことがある福祉活動は、地いきの清そう活動です。

近所の人たちと協力して、ごみ拾いや近くの神社のそうじをします。これをする事で、地いきの道や神社の草などが少なくなり、きれいになります。きれいにするだけではなくて、あいさつやお話をする事で、お年よりの健康じょうたいをかくにんできる大切な場です。近所のおばあちゃんや、私にうれしそうなお顔で話してくれます。私も元気そうなおばあちゃんとお話するのが楽しいです。

私にできる福祉活動は大きくないけれど、誰か一人でも自信を持たせたり、よろこばせたりできる小さな活動です。私は、これが続けていくことが大切だと思います。

また、すれちがったお年よりにあいさつをしたり、プルタブ回しゆうを行ったり、私ができる新しい活動にチャレンジしていきます。



〇入 選

実習を振り返って学んだこと

海翔高等学校 一年 竹下 海生

デイサービスという名前を聞いてどんなことを思い浮かべますか？名前の通り一日でサービスを提供するところですが、具体的にどのようなサービスをどういった形で行っているのか、そこからどんなことに繋がっているのか知らない人も多いと思います。そこで私が初めてのデイサービス実習を通して学んだことについて書いていきます。

まずは入浴介助の際に職員の方が利用者さんに話している場面についてです。

「シャンプーしていくので手を出してくださいね。」

「背中を洗うので足や手はご自分で洗ってくださいね。」

と職員の方は利用者さんが一人でできるところは任せ、逆に少し難しいところはお手伝いをしていて、その方が出来ることはその方にしてもらっていることが分かります。デイサービスの本来の目的は利用者の方が自宅で自立した日常生活を送ることが出来るようにすることなので、職員の方が全てをお手伝いするのはなく、自分でできるところは行ってもらう自立

支援に繋がる動きをとっているのではないかと思いましたが、仮に職員の方が、利用者さんが自分でできるところを全てしてしまった場合、その方のできることを、本来持っている力(ストレングス)を奪ってしまうため、本来の目的からずれてしまいます。実習先で利用者さんとお話した際にずっと一人暮らしか、またはご家族の方がきても一週間に一度程度の人が比較的多かったため、一人で生活ができるように入浴の場面などからも自立支援に繋がる動きがあるのではないかと思いました。

また、身体介護を通して自立支援だけでなく、同世代の方や職員の方と関わってお話したり、何かレクを行ったりと楽しいことをする時間が一日の中で少しでもあることで、一人で家に言うときの孤独感が軽減されるため、精神的自立にもつながるのではないかと思いました。また精神的に自立することで、一人暮らしをしている方でも食べたいものを自分で作って食べるという当たり前のことができ、本来の目的が達成できるのではないかなと思いました。

私は、実習に行く前、服を着替えることや食事をする場面での自立支援しか思いつかなかったのですが、今回、実際に実習に行き、入浴介助の見学をした際に入浴介助からも自立支援に繋がる動きがあることにとても驚きました。高齢の方の中には認知症の方、身体に障害を持った方などさまざまな方がいますが、どの

方も一人で着替えたり、自分でごはんを食べたりと私たちが今当たり前にしていることを当たり前にしていただきました。福祉用語の自立とは他者の手を借りることなく自分で物事をこなすことができるといった一般的な自立とは違い、他者からの手伝いを受けた状態でも自分で選ぶことができ、自分で決定すること・ごはんを食べることができなくても、人として自己選択・自己決定する権利があり、意思疎通が困難な方でもその方に寄り添って一緒に考えてあげることが大切だと学びました。

また、今の日本では少子高齢化が年々進んでいたり、外国から日本に来て日本に住む方が多くなったりしています。例えば、言葉が通じ合わなくても互いに心を通わせ、心での会話をすることもできると思います。そして困っている人がいたら思いやりの心をもって手を差し伸べ、どんな人にも差別されることのない、誰もが暮らしやすい社会が実現すればいいと思います。そのために道を歩いて困っている人を見かけたときや、電車で妊婦さんや小さい子どもを連れた方などで座ることができない人を見かけた場合には、声をかけてみようと思えました。

今回の実習では沢山のことに気づき、沢山のことを学ぶことができました。

〇入 選

高齢者疑似体験から学んだこと

弥富北中学校 一年 青木 優有

私は、弟がサッカーで足を骨折してひざが包帯でぐるぐる巻きにされていて、ひざが思うように動かなくて歩きにくそうな姿を見て、小学校で高齢者疑似体験をしたことを思い出しました。それで、もつとくわしく知りたいと思ったので、調べたり、もう一度体験してみることになりました。

まず、高齢者疑似体験とは何かを調べました。高齢者疑似体験とは、疑似体験装具を装着して日常生活を疑似的に体験し、加齢による身体的な変化や高齢者の気持ち、介護方法やコミュニケーションの取り方を体験的に学ぶことができるというものであります。

私も早速、家にある物でやってみました。ひじとひざをダンボールで固定し、重たいリュックを背負い、手袋をし、手首と足におもりをつけて、耳せんをしました。その状態で階段の昇降、お箸やスプーンを使って豆の移動、ボールを投げ、財布からのお金の出し入れ、ペットボトルのふたを取りジュースをコップに注いだり、長い時間歩くということをしました。

実際体験してみると歩くだけでもきつくて、普段は何とも思わない距離がとても長く感じました。また、

階段の昇降は、階段から落ちそうになったりして全然上手く進むことができなかったです。お箸やスプーンを使って豆の移動を一分間でいくつ出来るか試してみたところ、通常の場合二十三個で、高齢者疑似体験の場合十一個しかできなかったです。ボール投げでは、重たいリュックを背負っているし、ひじが固定されていることから全く投げられなかったです。お金の出し入れは、財布のチャックを開けるのが難しいし、中々お金を取ることができなかつたです。ペットボトルのふたも、手袋をしているため手が滑っていつも以上に開けるのが大変でした。

このように私たちが普段何気なくとっている行動は、高齢者の方々にとってはとても困難であることが分かりました。そんな不安な生活をしている高齢者の方々が少しでも安心して生活ができるようにしていかないといけないと思います。なので、今回私が高齢者疑似体験をして、私だったらこうしてほしい、こうすることを四つ挙げていきたいと思えます。

まず一つ目は、手すりやスロープを増やしてほしいと思えました。理由は、私の家の階段には手すりが一つしかなくて体が安定しなくてすごく怖かったからです。ですが、スロープだと体力的にも高齢者は助かりますし、安心して歩くことができますし、時間も階段よりかからないから高齢者でも気軽ににお出かけができるようになるからです。二つ目は、ろう下などの幅を広

くするといいい思いました。理由は、幅がせまいと歩きにくいし、いざ車椅子になった時でも幅が広い方が良いからです。三つ目は、ドアを引き戸にするといいい思えます。理由は、引き戸の方が開け閉めしやすいし、毎回後ろに下がったりしないでいいので負担が減るからです。四つ目は、玄関等にすぐ座れる椅子を用意するといいい思えます。理由は、玄関の段差が高いと靴が履きやすいし、腰に優しいからです。

今回この作文を書くにあたって思ったことがあります。母は持病で全身の関節痛が日々あるため、ヘルプマークを持参しないといけないのです。ですが、駐車場に停める時に優先駐車場に停められるのに、出来るだけ停めません。なので、私は、母に理由を聞くと、「自分より不自由な人のために空けておきたい。あと、停めた時とかにそういう目で見られるのが嫌だ。」と言っていました。母みたいにプライドの高い人が高齢者の中にもいると思えました。

これから高齢者の方々と接する時に、高齢者の方々の中にも、「自分はまだ若い、まだまだ動ける。」と思っただけで行動している人もいるはずなので、声をかける時や手助けをする時などに、もしかしたらそう思っているかもしれないと頭の中に残しつつ、困っていたら助けてあげたいと思えました。

○入 選

ふだんのくらしの幸せ

白鳥小学校 五年 日箇原 央空

ぼくは学校で、初めて車いすに乗る体験をしました。すわりごこちはソファにすわったような感覚で快適でした。自分でタイヤを動かして、回転するのにすこくうでの力を使いました。ふだんから車いすに乗っている人は、うでの力がすぐきたわるだろうなと思いましたが。そのあと、介助する側も体験しました。自分が思っていたより楽におせたけれど、ずっと続けるのは大変だと思います。

坂道を上ることを想像すると、とても重くてつらいだろうし、車いすといっしょに転がってこないか心配になりました。

次に、点字の勉強をしました。点字といわれて家にあるものでぼくが思いついた物は、ふりかけ、シャンプー、トイレのボタンなどには、凹凸があります。それらの凹凸は目の不自由な人のためにあると思います。ぼくがさわっても、なにも分かりません。目の不自由な人は、ふつうの勉強だけではなく、点字も勉強しなくてはいけません。大変だと思いました。

外に出かけたときに、点字ブロックをよく見かけます。ぼくは、小さいころ点字ブロックをふんで遊んで

いました。そのとき、お母さんに、それは目の不自由な人がまよわずに道を歩くためにあるんだよ、と教えてもらいました。それを聞いてぼくは、目をつむって歩いてみました。どこになにかあるのか分からなくて、不安でした。また、点字ブロックがこわれている所がたぐさんあり、目の不自由な人が歩いたら、転びそうになるし、どこに行ったらいいのかわからなくなってしまうと思うので、こわれていたらすぐに直してほしいと思います。

目が不自由な人のためなのに、なぜ黄色なのかぼくはぎもんに思ったので、しらべてみたら、周囲の路面などと差をつけるためだそうです。でも最近では、景観のために、グレーや白、茶色の点字ブロックが各地で広がっていき、弱視の人にとっては見えにくいと問題になっていくそうです。ぼくは、点字ブロックの色は黄色の方が目立つと思うので黄色がいいと思います。

街中でこまっている人や、お手伝いが必要な人を見かけたなら、声をかけて自分に来ることをしてあげたいと思います。

いまぼくが生きているあたりまえのくらしがどれだけ幸せであるかということ、これからも考えていきたいです。

【佳作】

人々の変化

十四山中学校 三年 船野 あおい

みなさんはボランティアに参加したことがありますか？今から話すことは夏休みに私が参加したボランティアについてのことです。

私は夏休みに発達障害を抱えている幼児、小学生、中高生のいるところにボランティアにいきました。ボランティアの紙が学校からくばられて、始めは何となくで参加しようと思っていました。

ボランティア当日、施設の中に入ると大きな叫び声や奇声をあげている子がいたり、凄いでかい物音がしたりして初めて見る光景に衝撃を覚えました。発達障害を抱えた子達と触れ合う機会はほとんどなかったのですが、慣れていかなかったのもあり、本当に手伝うことができるのかとても不安で心配になりました。

初めは、係の人に施設の話を書きイメージをつかめたので、幼児の子のお手伝いをしました。幼児組には女の子二人がいて、二人のうち一人は自閉症だとききました。自閉症という言葉は何回か本やテレビで聞いたことがあったので、実際にその障がいの子を初めてみた時、本で見た子と症状がほんとに似ていてびっくりでした。小学生組の部屋からはすごく大きな物音

がして気になつてしまふので、オルゴールをかけたたりして気を紛らわしたりしていましたが、頭をおさえたり、目をつぶつていたりするところをみて、とても辛そうだと感じたし、見ているだけでも辛くなりました。自閉症とは言葉の遅れや指示が理解できない、感覚の過敏性があるといったものが見られます。言葉を話せなかつたり、理解できなかつたりするので、係の人は、手を使って簡単なことから理解できるようにサポートをしていました。一つの例として例えば、せんたくばさみをはさむ動作を、スプーンやフォークをにぎる動作に近づけていくなどの工夫があつてすごいなと思ひました。また、その子はとても感覚に敏感なので、一つの物にたくさん触つて感覚を感じとつていたり、自閉症の特徴を見つけることができました。

今世界にはものや人に対しての差別などがあり、差別はずつと続いています。その中には、障がい者差別があります。ボランティアで行つた施設のとなりには障がい者の方々が働く施設がありました。障がいをもつている人は私たちと同じようなことをしたりできないのでしょうか。なりたくてなつたわけではなく、もしかししたら、私たちが障がいを抱えることになるかも知れないというのに、障がい者の人々を偏見で差別することは良いことなのでしょうか。私は絶対にあつてはいけないことだと思ひます。障がいにはいろんな種類があつて、みんなが同じように仕事をするのは難

しいかもしれないけれど、だからといって働く場所が制限されるなんて自分が障がい者の立場だったらとても悲しいです。みなさんも、もし自分の立場だったらということを考えてみてください。

私は、今回ボランティアに参加してみて、発達障害の方とはじめてふれ合いました。私と見た目が違ってそれでは当たり前のことであって同じ人間です。優しく話しかけてくれる子もいて、そんな子たちが差別される世界は本当に汚れていると思います。障がいをもっているからできないことがあったって、みんながみんな同じことができなくなってしまうのではないと思わないでほしいです。

障がいをもっている人たちだって私たちと同じようなことができる人はたくさんいます。もちろん同じようにできない人だってたくさんいます。だけど、普通の人だってできないことはたくさんあるはずです。私たちは支え合って生きることができずすきな人間なんです。偏見をなくし支えあっていくこと、理解していくことが、この世界にはとても大切だと思います。もちろんすぐには難しいし、理解しあうことは大変だと思います。ただ『障がいをもって』』『私たちとは違う』』という偏見がなくなるだけでも、たくさんの方が生きやすい世界になると思います。

たった数人の偏見がはずれただけじゃ正直何もかわらないと思っていたときもありました。だけど、そ

の数人の偏見がはずれることは、この先の未来にとっても大事だと今回のボランティアで気付かされました。変わり続けている世界に私も合わせて変わっていくことも大切だと思います。

これまでもこの先も世界は変わり続け、変わっていく中でも変わらないものと変わっていくものを理解して、未来がいい方向に変わっていくことを願っています。そして、自分もできることを探していきたいです。

【佳作】

世界中の人に幸せを

弥富中学校 二年 佐藤 那夕子

私は髪を伸ばすことが好きです。なぜなら、ヘアアレンジを楽しむことができるからです。だから、髪を伸ばしていました。そんな私を見ていた母が「ヘアドネーションしてみない？」と言いました。私は「何それ？」と思い調べてみると、「髪を寄付する」ことでした。寄付された髪は小児がんや無毛症、怪我の治療などで髪を失った子供たちのためのメデイカルウィッグに活用されることを知りました。

この活動は、米国ではじまり、日本での活動が始まったのは二〇〇九年です。

ヘアドネーションでは、三十一センチ以上の髪の毛であれば、癖毛や白髪、パーマやカラーリングなどを施した髪の毛でも寄付することができ、老若男女、国籍、年齢問わずに誰でも参加可能です。放っておけば自然に伸びてくるので、めんどくさがりな私でも簡単にボランティアできると思い、やってみることにしました。

髪の毛の寄付のやり方は、自分で切るか、ヘアドネーション賛同美容室にお願いして切ってもらい、自分でボランティア団体に送ります。私は器用ではないので、賛同美容室に行って切ってもらうことにしました。今まで髪の毛を伸ばしていると重かったり、洗うのが大変だったりしましたが、誰かの役に立てることがすごくうれしかったです。実際に切ってみると、とても頭が軽くなったように感じましたし、洗うのがすごく楽になって、切ってよかったなと思いました。

美容師の方のお話を伺っていると、寄付する髪の中にはどうしても短いものも交じっていたり、実際にウィッグに使えない毛もあるみたいなのですが、そういった髪の毛もウィッグの作成費に当てるために転売されて、カラーリングのテストピースなどに活用されるみたいです。

私が寄付した私の髪の毛も実際にウィッグになり

子どもたちの手に渡るかもしれないし、別の何かに活用されるかもしれないけど、何にしても、もともと捨てられるはずの髪の毛が、何かの役に立ってくれていれば、私は満足です。

今回、ヘアドネーションをやってみて感じたメリットとデメリットを三つずつ紹介します。

メリットの一つ目は、人の役に立てることです。病気などで髪を失った子供たちを自分の髪の毛で笑顔にすることができるとはとてもうれしかったです。二つ目は、お金の余裕がなくても寄付ができることです。資金がかからない寄付なので、お金の余裕がない人でもお金をかけずに人の役に立つことができます。三つ目は、環境に優しいところです。髪の毛が分解されて自然に返るのは、非常に長い年月がかかるようです。髪の毛の事業廃棄物が増えると環境汚染が進んでしまいます。ヘアドネーションは、地球のために推進されている「3R」が可能です。

次にデメリットを紹介します。デメリットの一つ目は、髪の毛を伸ばすのに時間がかかることです。ヘアドネーションは最低でも三十一センチ必要です。髪の毛は一ヶ月に一センチほどしか伸びないので、そう考えると約三年以上必要になるのでとても大変でした。二つ目は、髪の毛が長くなりすぎることです。長くなりすぎると服のファスナーに引っかかったり、ドライヤーが大変だったり、髪の毛が多いと肩がこることも

あるみたいです。三つ目は、ヘアドネーション後の髪の毛が予想以上に短くなることです。ヘアドネーション後は、今より三十一センチ短くなるだけでなく、髪の毛を整えたりするので、予想より五センチから十センチくらい短くなってしまいます。私はロングヘアが好きなので、肩につくぐらいに切るつもりでしたが、結局予想以上に短くなりました。以上が私が体験してみte感じたことです。

日本では、まだ始まって間もないボランティアですが、髪を切りたい人が気軽に参加できるように、多くの美容室で対応してくれる所がもつと増えていくといいなと思えました。誰でもできる簡単なボランティアなので、いろんな人に参加してほしいと思えました。

【佳作】

福祉は人のためならず

栄南小学校 五年 加藤 里緒菜

「福祉」ってなんだろう。夏休みの宿題で福祉の作文を書くことになって、私が最初に思ったことです。スマートフォンで検索すると、「しあわせ」また、「

人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとすること」と出てきました。むずかしくて、やっぱりよく分かりませんでした。だから、お母さんに聞いてみました。それで、なんとなくですが、周りの人たちをしあわせにする事なのかなと分かりました。自分のことだけで精いっぱいなのに、人をしあわせにするなんて私にはハードルが高いなあと思えました。でも、まずは身の回りでだれかのためにやっていることをさがしてみました。

最初に思いついたことは、元気の無さそうな友達に声をかけたり、こまっている友達を助けたりすることです。どちらも友達のためにやっていることですが、みんなが楽しいと私もうれしいので、私のためでもあります。そうやって考えていくと、ふだん何気なくやっていることが福祉で、それはめぐりめぐって自分のためになっているのかもしれないということに気がつきました。

例えば、コロナ対さくのマスクや手洗い、うがいもそうです。私が感せんしてしまうと、おじいちゃんやおばあちゃんに移してしまいかもしれないので、おじいちゃんたちのために、気を付けています。でも、おじいちゃんたちが元気だとうれしいし、もちろん私もコロナにかかりたくないのです、自分のためでもあります。

今回福祉について考えてみて、福祉は正義の味方や

スーパーヒーローじゃなくても、誰にでもできることだということが分かりました。遠くのしん災のボランティア活動や、知らない人を助けたりするのはハードルがものすごく高いですが、ふだんの生活の中の自分の手ごとどくはん囲のことなら私にもできそうな気がします。もしも、地球上のすべての人々が自分たちの手のとどくはん囲から福祉を始めていけば、いつかは世界のすべての人をしあわせにすることができるとも生まれません。

そして、人のためにも思っで行動したことはめぐりめぐって自分のためにもなります。この話をお母さんとしてみたら、「情けは人のためならず」という言葉を教えてくれました。人に親切にすれば、その相手のためになるだけでなく、やがてはよい報いとなって自分にもどってくる、という意味です。よく間違っで、親切にするのはその人のためにならないと覚えている人も多いという事も教えてもらいました。

お母さんの話を聞いて、私は「福祉は人のためならず」だなと思いました。これからも無理せずに、できるはん囲で私なりの福祉を世界のためにも、私のためにもがん張りたいです。

【佳作】

きんちゃんバスにのって

日の出小学校 四年 三輪 一登

ぼくは、夏休みの初日に、一人できんちゃんバスに乗って総合福祉センターへ習字教室に行きました。

一人でバスに乗るのは初めてだったのでドキドキしていました。いざバスに乗ると、バスの中は、高齢者のおじいさんやおばあさんたちでほとんどの席がうまっています。バスのうしろの方のまど側の席が一つ空いていたのでそこにすわりました。こおりの様に、ガチガチにきんちゃんのようにいたぼくに、反対側の席にすわっていた一人のおばあさんが、

「何年生？」

と、やさしく声をかけてくれました。ぼくは、

「四年生です。」

と答えました。きんちゃん（こおり）がとけました。そのおばあさんは、白いぼうしをかぶっていて、こしが少しまがついていて、てすりにつかまってすわっていました。年は八十二とおしえてくれました。八十二才とはおもえないほど、とても元気だったのでびっくりしました。おばあさんの昔のしよくぎょうは、なんと弥富市の小学校の給食を作っていた人だったので、ぼくは、すかさず、質問をしました。

「どのくらいの量の給食を作ったの？」

「よーけたくさん作ったわ。」

「どこの小学校でやってたの？」

「日の出小、桜小、弥生小いろいろ転きんしてやっ
とったわ。」

と聞いてうれしそうに話しをしてくれました。話して
いるうちに総合福祉センターにつきましました。ぼくとお
ばあさんはいっしょにおりました。お礼をつたえたか
ったけれど、おばあさんは友達と話していたので、つ
たえることができませんでした。

習字教室がおわってバスでいでバスをまっていたら、
行きのバスで会ったおばあさんと帰りも同じバスでし
た。おばあさんがぼくに、

「心配しとったけん。」

と言ってくれました。おばあさんは、だんなさんが死
んでしまつて、子どもも一人だちしているから一人ぐ
らしになつてしまつたそうです。バスを利用して
理由は、車にのれなくなつてでかけることができなく
なつてしまつたので、バスを利用していろいろなお友
達に会いにいつて話をしているそうです。おばあさん
が、

「一人でバスにのるなんて弥富市のほこりだ。」

と言つてくれましたが、ぼくは、はずかしくなつてう
なずきながらだまつていました。

バスからおおりるときに、おばあさんがぼくに手をふ

つてくれました。ぼくは、おじぎをしてかえしました。
きんちゃんバスは、習い事や通学、通きんだけでは
なく、車にのれなくなった人たちも利用していること
がわかりました。
おばあさんに助けてもらった経験を生かして、困つ
ている人を見かけたら今度はぼくが声をかけて助けた
いです。